「ガイジン」という呼称に見る大学生の異文化接触態度

―多文化共生の地域社会をめざすために―

鈴木崇夫、早野実花
SUZUKI Takao,　HAYANO Mika

1. はじめに

出入国在留管理庁によると、2023 年 6 月末の在留外国人数は 322 万 3,858 人で、300 万人を超えて過去 20 年間で約 1.7 倍となっている。とりわけ筆者らの所属大学がある愛知県は在留外国人数全国第 2 位の 29 万 7,248 人となっている。愛知県を中心に東海地域には日本語指導が必要な外国ルーツの児童生徒も群をぬいて多く、学生のほとんどが大学に上がるまでの学校生活の中で、生活者としての外国人と接触した経験を一度は有している傾向にあると考える。

厚生労働省が発表した 2022 年の人口動態統計（確定数）では、2022 年に出生した子どもは 77 万 759 人で、合計特殊出生率は 1.26 と過去最低であった。出生数と死亡数との差にあたる人口の自然減は 79 万 8,291 人で 16 年連続の減となっている。つまり、生まれてくる子どもの数よりも人口減が大きくなっており、社会問題は少子高齢化から人口減少へシフトしつつある。国立社会保障・人口問題研究所が 2023 年に公表した日本の将来推計人口では、2056 年には総人口が 1 億人を割って 9,965 万人となり、2070 年には 8700 万人まで減少するとされている。生産年齢人口（15～64 歳）は、2070 年には 4,535 万人になるとされ、人手不足により現在の日本の産業を維持することが困難であることは推察するに難しくない。

こうした背景を受けて、政府は入管法や制度の改正を図って、外国人材の受入れと活用を積極的に進めている（出入国在留管理庁 2023）。2023 年現在では、総人口に占める外国人の割合は約 2.2%であるが、上記同推計では、10.8%程度になることが見込まれており、現在の大学生が社会人として経済活動の中心を担う頃には、外国人と職場を共にすることが今よりも当たり前になっていることが予想される。

2. 研究の目的と研究課題

本研究は、外国人の呼称として現在でも用いられることの多い「ガイジン」という言葉に着眼し、多文化共生の地域社会に根ざすという見地から、大学生の異文化接触態度について一考察を行うことを目的とする。

大学生が「ガイジン」という言葉を見聞きしたり、使ったりする場面において、どのような異文化接触態度をとっているのかについて、その特徴を整理していきたい。

3. これまでの関連する研究

3.1　差別の定義

西尾（2001）は、差別語であるかどうかは、その人がどんな立場に立ってモノを見るか、判断するかで決まるとしている。また、差別語は人間の長い歴史の中で、その実態のために、対象の人たちが社会から疎外されてきたという負の歴史（事実）を背負っていることばと定義している。本論では差別表現をこの定義に従って考える。

3.2　呼称「外人」の変遷

『NHK ことばのハンドブック』(2005) によると、「外国人・外人」の見出しに、「外人」という言い方は、「外国人」と異なったニュアンスがあり、外国人の中には「外人」という呼称に抵抗を感じる人もいるので使わないと記されている。岡本（2009）は、通時的に「外人」ということばの使用に触れ、国際化が始まった 70 年代は、国内の外国人登録者数は総人口の 1%にも満たず、「あこがれ」の欧米先進国から来日した外国人を特別視し「外人」と呼んでいたという。80 年代から 90 年代初頭には、アメリカ人作家や記者によって、日本人が「ガイジン」を排除し阻害していると報告され、それに関連する出版物が相次いだことから「外人」は差別語であるとした偏った見方が広がった。しかし、近年では再びマスメディアや公共の場で「外人」が使われ始めているという。現在においては、日本人が「外人」と言うとき、多くは「外国人」の短縮語であり、そこに差別の意識はなく、中立なことばとして使っている場合が一般的であるが、マスメディアはこれまでの取り決め通り、「外人」は差別を助長する語や不快語であるから、「なるべく使わない」という姿勢をとっており、「外人」が差別のことばなのか、区別なのか、揺れている状態にあると述べている。

3.3　日本社会のウチ／ソト／ヨソの枠づくり

岡本（2009）によると、日本社会では、言語をはじめ生活様式や思考方法、価値観の共通性が「ウチ」メンバーになるためには重要な要素であるが、明らかに異なる容貌と遠く離れた地理的距離感は「ソト」「ヨソ」のイメ

ージを強め、「外人」という枠組みが作られるとしている。

3.4　マイクロアグレッション

マイクロアグレションは、1970 年代に精神科医のピアスが人種主義（レイシズム）が精神衛生に及ぼす影響を研究する中で初めて使用した造語である。2000 年代に入り、コロンビア大学教授の Sue は、それまでに行われたレイシズムに関する様々な研究を踏まえ、自らの経験とインタビュー調査の結果をもとに、偏見やステレオタイプに基づく言動のうち、それが目に見えにくいが受け手にダメージを与えるものをマイクロアグレションとして定式化した。

例えば、外見が異なる人に「日本語が上手ですね」　や「お箸を上手に使いますね」などと言う場面があげられる。話し手が無意識のうちに自他を区別し、聞き手がそのメッセージに対してアイデンティティの不安を感じるような状況である。この発話の前提には、外国人の日本語はわれわれ日本人のものとは異なる、外国人はお箸をうまく使えないなどが存在しており、それが隠されたメッセージとして相手に伝わりダメージを与えてしまうことである。

4. 研究の対象と実践の手順

本論では、S 大学（私立・文系理系の総合大学）の初年次全学生（約 2,200 人）が必修で受講する「多文化共生」の授業において、受講学生が授業内で作成したグループワークシートを研究対象とする。2023 年度に筆者らが担当した 7 クラス（専攻：言語、文化、教育、医療、福祉、心理、国際関係）に絞って、グループワークシートを質的に分析した。

授業の実践の手順は、以下のとおりである。

① 先行する授業回に、ゲストスピーカー（日系ペルー人四世）の講話を聞く。（その中で、「ガイジン」という言葉に不快感を覚えるという話がある。）

② 後行する授業回に、「ガイジン」「ガイジンさん」が差別表現であるか否か立場をはっきりさせた上で、その理由をプリントに記述する形で言語化する。

③ ４人～６人で１グループとなり、一人ずつ自分の意見を理由とともにメンバーに話す。

④ ディスカッションをしながら、グループワークシート［A3 用紙］にまとめる。

⑤ クラス全体に向けて、グループワークで話し合ったことや、気づき、疑問などを発表する。

本研究では、④のグループワークシート（成果物）を主な分析対象とした。

5. 分析結果

5.1　呼称「ガイジン」への立場

まず、上述の実践②に記した呼称「ガイジン」が差別表現であるか否かについての大学生の回答結果である。

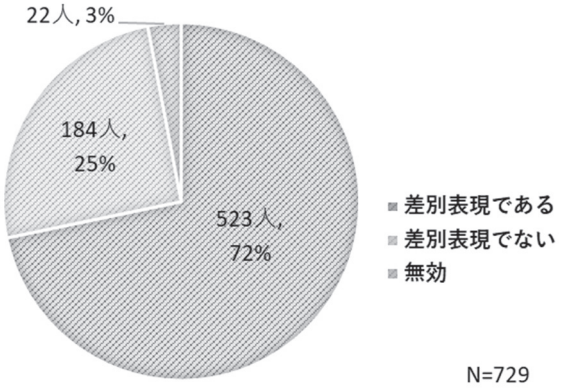

図１　大学生の「ガイジン」使用意識

図１の結果のように、「ガイジン」を差別表現だとしたのは、全体の 72%　にあたる 523 人であった。一方で、差別表現ではないとしたのは 25%で 184 人となった。岡本（2009）では、近年では「ガイジン」を使用する際に差別の意識はなく、中立なことばとして使っている場合が一般的だとされているが、今回のように「差別表現か否か」という直接的な聞き方で考えた場合においては、約 7 割が差別表現であると答える結果となった。本実践授業に先行する授業回でのゲストスピーカーの講話の影響があることは含み置く必要はあるが、高い割合で差別表現と捉えていることがわかる。

5.2　回答理由の質的分析―ワークシートを基に

上述の立場について、その理由をまず個人で考え、次いで自分の意見をグループで共有し、他者の意見を聞いた上で、呼称“ガイジン”についてディスカッションを行い、成果をグループワークシートにまとめさせた。成果物に記述された内容（以下の表内）を分析すると、その背後にある異文化接触態度は、その他を除き、大きく６つのカテゴリーに分類することができた。①「「ウチ」と「ソト」の文化」、②「マイクロアグレッション」、③「共感的感覚」、④「見聞き・伝聞（他者責任）」⑤「字面・聞こえ」、⑥「本議題の検討回避」、そして「その他」である。

①「ウチ」「ソト」の文化

差別表現である	差別表現ではない
疎外感、孤立感、外の人、偏見的、除外、排他的、よそ者、部外者、仲間外れ	日本の外から来た人という事実
同じ日本に住んでいる人なのに、自分とは別と言っているのと同じ	自分も外国に行ったら”外人”
「あなたたちとは違う」と強調している感じ	日本人としての自覚があっての表現
壁がある、区切っている、枠から外れている、境界線、距離を感じる	お互いに自分の国を誇りに思い、気にしなければいいから

外人は国じゃなくて人で分けてる感じがするから	日本人ではないから呼んでも良い
「外人」は日本に住んでいることを遠回しに否定している感じがする	立場がちがう
「外」と「内」で分けてる、特別・異質な扱いになる	国籍の違いを把握するため
国だけでなく別の何かが違うように聞こえる	日本の外から来た人という事実
自分の国以外の人をまとめている、国の違いを強調しているように感じる	自分も外国に行ったら”外人”
先入観をもってしまう	
「外人」というと「日本人以外」という意味を強く感じる、日本人と極端に分けてる感じがする	
日本人以外の外の血	
もともと住んでた人と他の国から来た人は対等に扱うべき	
度を越えた区別	

② マイクロアグレッション

差別表現である	差別表現ではない
見た目だけで外人というのは違う、見た目が違うだけで呼び方を変えるのは良くない	特徴を表現することば
肌の色などで人種の決めつけ×	
国籍、見た目で判断しちゃう、見た目や話す言語で判断している	
見た目は日本人じゃないかもしれないけど、その人が日本生まれ日本育ちかもしれないから	
外国人＝日本国籍でない人 ガイジン＝見た目、顔立ち	

③ 共感的感覚

差別表現である	差別表現ではない
共に生きる上で理解しあった状態で言葉を表現したほうが良い	人によって言葉の受け取り方がちがう
相手が嫌だと感じたらそれはもう差別	自分が「外人」と言われても問題ないから
ひとまとまりにされている感があって嫌な気持ちになる	一般的に禁句にするよりも、個人個人が決めるべき
自分たちがどう思うかよりも、「外の人」というとがった表現を受け実際の外国人の人がどう考えるかが重要	
言われた側は差別されていると感じる 言った本人は気づいていない	
日本人も外国に行って同じように呼ばれたらそう感じる	

③ 見聞き・伝聞（他者責任）

差別表現である	差別表現ではない
実際に呼ばれて嫌な気分だったと聞いた	日本人が勝手に悪い意味だと教えただけで悪い言葉ではない
親から「外国の人」と言えと言われた	
ネットで叩かれてたから	
メディアで「外人」は良くないと言うイメージの共有	
元来そういうものだという意識が根付いていた	
「外人」という言葉が差別だと日本で振動しているので、「外人」＝差別だという認識	
中学校の先生に言われた	
昔、「外人」「外人さん」は差別表現と習った	

⑤ 字面・聞こえ

差別表現である	差別表現ではない
漢字から差別を感じる、日本の漢字は言葉の意味をあらわしている、「外人」という漢字が良くないのかと思った	字だけ見れば外の人と分かる
良いように聞こえない、響きが△、雑に聞こえる	「～さん」とつけることで丁寧な感じになる、「さん」が付くと敬意を表しているから
逆から読んで人外	話し言葉
文字で見ると冷たい、優しくない表現、マイナスな印象	雑な表現
「害人」ともとらえられるから、ガイジン＝害人、「害」と読みが同じだから、「外人」が「害のある人」と聞こえる	
悪口を使う時に使うことば、乱暴な言い方	

⑥ 本議題の検討回避

差別表現である	差別表現ではない
差別表現ではないかという話題がでるのは差別	差別表現として認識させられているからそう思えるだけだと考えるから
	差別かも、と考えることが差別
	「外人」が差別と考えることが壁を作ってしまっている
	差別だと言いすぎるほうが逆に差別していると思う
	差別表現に敏感
	勝手に傷付いてるだけ
	違和感はあるが、(差別は) 言いすぎじゃないか？と思う
	習慣の違う日本人と外国人をひとくくりにする必要がない 気にしすぎ
	何が差別表現なのかが理解できない、そもそも差別表現だと思っていない

その他

差別表現である	差別表現ではない
海外の人など、言い方に尊敬などを加えることやニュアンスによって変わると思う	区別するためのことば、どうしても区別しなければならないときがある
略すことで軽く見ている	呼び方がなくなる
日本中心の考え方に感じる	「外国人」を省略しただけ
「あなたたちとは違う」と強調している感じ	むしろかっこいい
一概に悪意があるわけではない	分かりやすく分けているだけ
軽蔑、敬意がない	事実だから差別ではない
	時と場合による 公で出す場合は気を付ければいいと思う

6. 考察

①「ウチ」と「ソト」の文化に関連するものとしては、「日本人以外」「日本の外」という表現に見られるように、われわれと彼らという考えが根底に見える。

②マイクロアグレッションは、“見た目”というのが１つのキーワードと言える。外見で判断をして「ガイジン」を使うと相手を傷つけてしまうというものである。

③共感的自己感覚は、相手の立場に立って考えようとする姿勢は読み取れる。しかし、自分が「外人」と言われても問題ないから差別表現ではないというような自分中心の考え方がそこ付随しているように見える。

④他者責任は（見聞き、伝聞）は、親や学校の教員などから差別だと教えられたというものや、メディアで印象付けられたというものであった。自ら問題の本質に触れるというよりは、他者の意見止まりの考えである。

⑤字面・聞こえは、字面や聞こえで「ガイジン」がどうかという視覚的、聴覚的な感覚に基づくものである。

⑥本議題の検討回避は、「ガイジン」が差別表現か否かを取り上げること自体がどうなのかという態度である。

その他には、岡本（2009）にも指摘があったような「外国人」を省略しただけというものや、「ガイジン」と呼ぶことはむしろかっこいいなどの記述も見られた。

全体の分析を通して見えてきたことは、これまで呼称「ガイジン」に対して特段の意識を持っていなかったとしても、本議題を話し合う中で、マイノリティとして置かれた外国人の立場や気持ちに寄り添って考えられるようになるか、考えようとするかが、まずもって重要であるということである。⑥本議題の検討回避に見られるような、「差別表現か否かを議論すること自体が差別である」、「差別表現か否かを議論するように、差別に関することを話題に出すことが差別につながる」という考えは、話題に出さなければ差別は起こらないという態度で、社会が抱える問題の本質、すなわち共生の課題を自分事として捉えるスタートラインにも立てていないということがいえる。無関心のままでは、共生社会の担い手にはいつまでたってもなり得ない。

はじめにでも述べたように、現在の大学生が社会の第一線で活躍する時代には、ますます多くの外国人が日本で働き、地域で生活をしていることが想定される。行政プランにもしばしば記載されることがあるが、多文化共生社会の実現には３つの壁があるとよく言われる。日本語能力が足りないために必要な生活情報が得られないという「ことばの壁」、文化や生活習慣の違いに対する不理解、コミュニケーション不足による誤解や偏見・差別が生まれるという「心の壁」、外国人住民を想定していない制度や法律で不利益が生まれてしまうという「制度（法律）の壁」である。しかし、本研究を通して、若者（大学生）の異文化接触態度を見ると、３つの壁とは性質の異なる「無関心の壁」の存在が見えてくる。この「無関心の壁」を乗り越えることなしに共生の当事者にはなり得ないであろう。

7. 今後の課題

本研究では、“ガイジン”という呼称を１つのテーマとしてダイバーシティ社会への大学生の態度を分析したが、多様化する社会の中でどの状況を若者が差別と判断するのかについては具体的に探究するに至らなかった。また、高校卒業すぐの初年次生を対象としたため、上級生はどうなのか、その他の世代ではどうなのかについても多文化共生社会をめざすためには明らかにする必要がある。

他方、若い学生の「無関心の壁」を取り除くためには、やはり多くの他者とのコミュニケーションが必要である。本実践をとおして、自分の考えを言語化して伝える、他者の意見を聞くという一連のアクティブな学修は無関心を取り除いて「共生」の当事者になるために必要不可欠な過程であることがわかった。今後、それがより効果的に実践できるよう授業づくりの工夫をし続けていきたい。

参考文献

(1) 岡本佐智子（2009）「「不適切な」日本語表現考」『北海道文教大学論集』第 10 号, pp. 63-73.

(2) デラルド・ウィン・スー（2020）『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション―人種、ジェンダー、性的指向：マイノリティに向けられる無意識の差別』明石書店.

(3) 西尾秀和（2001）『差別表現の検証―マスメディアの現場から』講談社.

(4) 渡辺雅之（2021）『マイクロアグレッションを吹っ飛ばせ』高文研.

(5) NHK 放送文化研究所（2005）『NHK ことばのハンドブック 第 2 版』NHK 出版.

参考資料

ウェブサイト

・厚生労働省ウェブサイト（2024 年 2 月 29 日アクセス）
「令和 4 年（2022）人口動態統計（確定数）の概況」PDF

・出入国在留管理庁（2024 年 2 月 29 日アクセス）
「令和 5 年 6 月末現在における在留外国人数について」
「外国人材の受入れ・共生のための総合的な対応策（令和 5 年度改訂）」

・HUFFPOST ウェブサイト（2023 年 7 月 4 日付）
林慶「社会に期待してもいいんだ。「“外人”って言葉、やめてください」から始まった会話と連帯

新聞記事

・朝日新聞 朝刊（1996 年 4 月 7 日付）
水谷修（国立国語研究所長）「ガイジン（日本語よ：１）」